チェルノブイリと福島 救援を考える

広河 隆一

去年福島で原発事故が起き、まる1年チェルノブイリに行かないということは、初めてでした。福島原発の事故のあとは慌てふためいて現場に入ったりと、あたふたとしていました。私の場合は、4月頃から極端な疲労や下痢などの症状が続くようになりました。ツイッターで、何か体調に変化があったかどうかを尋ねたところ、いろいろな人が身体の変調を訴えられていると知り、やっぱりそうかと思いました。

チェルノブイリ原発

チェルノブイリ原発の近くで放射能を測ると、その度が変わります。数値が高い時というのは、中から放射能が漏れ出ているという時で、工事をしている時です。4号炉の支柱や煙突が今にも壊れそうになっています。4号炉と壁一つ隔てて隣は3号機なので、4号炉の支柱が倒れたりしたら、大変なことになってしまいます。そのために今、4号炉そのものを大きなドームで覆う工事をしているのですが、その時に猛烈な放射能が漏れてくるんです。

では、その中で働いている人はどういう人たちか。それは、チェルノブイリの事故で汚染された場所に住んでいる人たちです。汚染されたような土地には産業がありません。働く場所がない、若者たちには仕事がない。だから、そういった彼らが刈り出される、そういうシステムになっていきます。チェルノブイリ原発で2~3か月働くと、たいへんな量の放射能を浴びるので、自宅に帰されます。しかし、帰ったところで、身体も悪くして、ますます仕事は見つからない。

田舎の人たち

チェルノブイリから60キロ離れた村です。一番最初の頃、チェルノブイリの事故のことなどまったく知らない頃に出会った人たちです。この村に行くことはKGBが禁止していました。汚染地帯は広がっていないということを、言い続けていたのです。

お腹の大きな女性とか、子どもなどがここに暮らし、自分たちはどうになってしまうのかという不安で一杯で

した。事故から3年経っていましたが、汚染地域はまだ秘密にされていました。

村の中で放射能の測定をしたら、測定器からものすごい音が鳴り響き、針が振り切れてしまいました。村の人たちは、やっぱり自分たちはここに住んでいたら危ないのかと、とてもビックリしていました。車で村を出ようとしたときに、私は村人たちに囲われました。車をストップされて、女の人たちが泣き叫びながら窓から顔を入れ、とにかく今測った数字を紙に書いてほしい、そしてあなたの署名をしてほしいと言う。紙を政府に突きつけて、自分たちにはここから疎開する権利があるということを訴えたいと言っていました。

その頃は放射能測定器の持ち込みは禁止されていました。もちろん一般の人たちが放射能を測定することも禁止されていました。そこで私は、紙にその数値を書いて署名して彼らに渡しました。それからなんですね、私が放射能の怖さ、得体の知れなさというものを感じ始めていくのが。それで翌年、同じ村に行き、その後どうなったかを尋ねました。半分位の村人がすでに避難することができ、残りの人たちも避難を待っているという状況になっていました。

姉と弟

2つ目の出会いは、この子どもたちでした。事故から3年目に、ある村 安全な所として宣伝されていた村で出会いました。その当時は一つの村の中でも、道一本隔てて、こちらは危険、向こうは安全というように、一つの村が寸断され、崩壊してしまうということが起きていました。福島でも、安全宣言が出されて帰宅したりしていますが、それと同じことがチェルノブイリでも起こっていたのです。

2人の子どもがベンチに座っていました。なぜだかすごく気になって、単なるスナップですが撮りました。2回目に訪ねた時に、この子たちに写真を渡したいと村人に尋ねると、あの時は、お母さんが危篤の状態にあったんだと教えられました。その頃、この村ではガンで亡くなった人が非常に多かったそうです。写真を撮った後、間もなくしてお母さんは亡くなり、子どもたちだけが残されてしまうことになるのでした。

先ほどのように消えていく村があれば、住み続けざ

るを得なくなった村というのがある。そこに毎年のように、何回も訪ねるようになりました。

でも、その村に住んでいることは危ないんです。村には農場があり、そこでは豚が飼育されているのですが、この撮影をした頃に産まれた豚は、すべてが目が見えなかった。足が8本あるというような馬が産まれたり……。そういったことが、人々が住んでいる所で起こっていました。

母子たち

プリピャチには5万人位の人が住んでいました。事故の時にお腹が大きかった人たちは、特別なサナトリウムに收容され、そこで赤ちゃんを産みました。その記念写真です。赤ちゃんを抱いて、嬉しそうなお母さんたちがたくさん写っています。しかしこの後、やはり子どもたちに、いろいろな病気が見つかっていくわけです。一番左にいるのがタチアナさん。右端にいるのが長女のナターシャです。彼女は逃げる時にものすごい頭痛を訴えていくのですが、その後も病気が出てきます。赤ちゃんのアリョーナは20数歳ですが、今も身体中に腫瘍がひろがっています。

これから日本でも、こういったことが起こっていく、お母さんたちが自分を責めるという状態が広がっていくと思います。どうしてあの時、政府とか医者、電力会社、あるいはマスメディアの言うことを真に受けて、自分は子どもを連れて逃げなかったのだろうと。そういったことで自分を責める人が出てくると思います。タチアナさんの家は高い所にありましたが、どうして自分は、火災を起こした原発をベランダから観てしまったのかと。あるお母さんは、哺乳瓶を使わないでミルクを飲ませていたということで、自分を責め続けている。そういう人がいました。その赤ちゃんは小児甲状腺ガンになったんですが……。

結婚式

これは、もう一人の出会い。北の方で出会った、ニーナさんという女性です。彼女の所にもその後、通うようになります。

ここは周囲が皆、避難した村です。この一角だけが安全宣言を出されて、取り残されていました。問題は、

この人たちは何を食べていいのかということ。食べ物の問題が一番大きくなっていきました。それで、私たちが救援運動を立ち上げて最初のプレゼントが、食品の放射能測定器になりました。

福島4号機

事故から1週間目位に撮ったものです。煙突の右側が4号機。

去年の10月頃に、柵越しに撮影した右が4号機で、左が3号機。

福島上空から

2週間くらい前に撮影したもの。周囲で作業している人も大勢いることがわかります。

福島上空から何点か。

左が4号機、右が3号機。きれいな建物で残っているように見えるものが2号機。

津波被害あと

波江町。原発から7キロ位の所です。ずっと放置されていた子どもの遺体です。ようやく回収されました。

津波被害あとの捜索

捜索している福島県警の人たち。

チェルノブイリ汚染地図

チェルノブイリの上(北)に、真っ赤な塊 = 巨大なホットスポットがありますが、その入り口がゴメリです。パホモバさんはここで活動しています。真っ赤な地帯にいくつかの町があります。ナロジチ、ブリャンスキー、ホイニキ……そういった、一番放射能で汚染された所で暮らす子どもたちを放射能から守る活動をしています。

一番最初の頃、救援をするということにとても戸惑いました。まず、貧乏で大変な状態に落ち込んだ旧ソ連の国々が外貨獲得の手段としてとった政策は、チェルノブイリ救援団体を多く立ち上げることでした。それと同時に、本当に子どもたちを助けようとする団体

もありました。それらをどうやって見分けるかが、私たちの課題でした。

フランス辺りから、たくさんの救援物資を載せたトラックが被災地に向かいます。しかし、現地に着くまでの色々な所で少しずつ荷物は抜かれ、救援の必要な所に着いた時には、荷物がほとんど残っていなかった、そういうことがいくつもありました。

しかしその時に、私たちは腹をくくらなければなりません。そういう状態であっても、荷物を贈らないわけにはいかない。だから、あの頃は自分で自分に言い聞かせていました。ザルのように、水を掬っても水が滴り落ちるような物で、私たちはコップの水を入れている。しかし、その水を子どもたちに渡さなければいけない。滴り落ちるからといって止めてしまえば、一切の物が届かなくなってしまう。だから、続けると。

しかし、募金をした人は、寄付したお金のすべてが相手に渡ると思っています。そういう責任を、当然ながら感じます。そこで一番大事なのは、信頼できる現地のパートナーを見つけることでした。そういう中で出会ったのが、パホモバさんの団体でした。

線路

私たちにとって除染とはどういうものなのか。この線路の周りは森でしたが、大量の放射能を浴びてしまったので、木々は土の中に埋められてしまいました。そういう形の除染が一つありました。しかし、雨が降り、放射能は地下水に紛れ、地下水は100キロ以上離れた巨大な町、キエフの貯水池に流れていく。それを止めることはできない。なので、もう一度掘り出して、また別な所で埋め直さなければいけないという、大変な状態でした。

いくつかの村は除染作業をしましたが、放射能の値が高い所は除染をしてもダメだと判断されましたので、都会の中やある程度安全な、数値が低かった所だけでしか行われていません。

モスクワのお墓

消防士や原発の運転員たちが、急性放射線障害ということでモスクワの第6病院という病院に運び込まれ

ました。そこで、人々は次々と亡くなっていくのですが、日本の政府や保安員、電力会社は、チェルノブイリで亡くなったのは、「たった」「まるで」そういう言い方で、28人しか死んでいないと言っています。爆発で吹き飛ばされて死んだ人などは、放射能のせいでは亡くなったとは認めない。28人しか死んでいない、そういう言い方をしています。その他に死んだのは、小児甲状腺ガンの15人だけだと。それだけしか死んでいないんだから、心配しないでいいよと、彼らは、しきりに宣伝しました。

それをどこで宣伝したかが問題ですが、官報のHPで宣伝したんです。長崎大の長瀧という教授がやっていました。彼はチェルノブイリの調査の第一人者です。これだけしか死んでいない、だから私たちはチェルノブイリの心配をすることはないんだ、これからも大した病気は起こらないんだと。だけど、その数字にはカラクリがあります。ここに運び込まれて3週間以内に死んだのは28人だ、そういう書き方をしているわけです。

第6病院には何百人という患者が運び込まれているのですが、3週間以降に亡くなった人たちは、同じ症状であっても放射能のせいだとは認められていないんです。こういう話をしていると、だんだん腹が立つてくるんですが。

彼らはなぜ、小児甲状腺ガンを認めたのか。IAEAなど世界中の原子力を推進する人たちは現地で、小児甲状腺ガンは心配ありませんよと言っていました。大した被害はない、身体に影響を与えるような放射能は出ていないと。日本と同じですね。だけど、現地のお医者さんたちは、そんなはずはないと。お母さんたちも住民たちも皆、それは違うということを知っている。とくに、1989年から1990年に小児甲状腺ガンが急に、5倍に増えました。それでパニックが起きるわけですが、どうしたらいいのかと。医師たちはいよいよ恐れていたことが始まったということを使うのですが、それに対してIAEAは、それが本当かどうか調べましょうということで国際的な調査団を現地に派遣して調べた。そして、1991年5月に発表したのは、心配ありません。皆さんは、放射能が怖い怖いと思っているから、スト

レスで病気になるんですと。

まったく同じことが日本でも言われたんですね。25年も同じ言葉が使われている。調査団は、チェルノブイリの子どもたちを調べましたけど、重篤な病気はありませんし、小児甲状腺ガンの兆候もありませんと言った。それで、お母さんたちは怒って、どうしてストレスのせいだなんて言えるんだ。だったら、5歳、4歳の子どもが、病気になるのもストレスのせいなのか、あの子どもたちがどうして放射能のことを知っているのか、動物が病気になるのは、どうしてなんだと訴えるわけです。

残念ながら、その国際機関の代表は日本人なんです。重松逸造という広島疫学の大家ですが、彼には「心配ない」という役割を与えられた。大勢の科学者が、安全だ、安全だ、とテレビの前で言う役割、それぞれに役割を与えられているんです。病気はなかった、そこにいて構わない、政府の言うことだけを聞いていれば大丈夫と。まして、放射性ヨウ素をさけるために、安定ヨード剤を飲む必要もないと。そういうことを言っていくわけです。彼らは断罪されていくと思いますが。

そんななかで、地元の医者たちは抵抗して、自分たちで調べます。信頼している世界的な医者の権威を招いて一緒に検査をして、その結果を科学雑誌『ネイチャー』に発表する。IAEAが、心配ないと言った1年から2年後です。その時に、『ネイチャー』に発表されてしまったら、IAEA側も認めざるを得ないということで、ようやく小児甲状腺ガンは放射能のせいだと認められていく。

しかしすでに何年も経っており、いろいろな病気がどんどん、どんどん増えて続けている。ただし、彼らが放射能のせいだと言うことはできない、そんな証拠はないと発表されたのが長崎大学でのシンポジウムで、その時に座長であったのが長瀧、先程の政府の官報HPに問題ないと書いた人物です。全部、生き残っているんです、チェルノブイリの遺産である学者たちが。

それは昔、731部隊の生き残りの医者たちが、日本

の医学界を作ったのと、まったく同じ構造がここにもあったわけです。

プリピャチ

死の町になったプリピャチです。福島県で学校を開いても大丈夫という数字は3.8マイクロシーベルト毎時ですね。ここプリピャチの現在の放射能の値は、だいたい3~4マイクロシーベルト毎時です。私たちは想像力を使わなくてはなりません。ここの死の町の中を子どもたちが走り回っても安全、大丈夫だということを日本は言っているわけです。

バスやヘリ

チェルノブイリ事故の時、避難に使われた車やバスです。放射能が強すぎて、これから処分されるのを待っているところです。

ムラの十字架

処分が終わり家々が埋められた跡です。墓標が建っています。何年何月にこの村は死んだと書かれています。

ペトリアエフ

直ちに影響はない、では何が起こっていくか。事故で亡くなった人の肺の切片をエックス線のフィルムの上に置く。しばらくすると、光を当てなくても光を取り込んでいきます。これはプルトニウムです。1センチ四方の所に、3000くらいの光のようになる。そして確実にそこからガンが始まっていく、そういうことをペトリアエフは研究しています。

倉庫の資料

日本は、急性放射線障害のことだけを取り上げて、直ちに、直ちにと言っていますが、では、直ちに病気が起こらないのなら、いつ頃起こるんだ、未来はどうなんだ。そういうことを、誰一人メディアの人間は問い合わせませんでしたし、テレビの解説者たちも一言も質問しなかった。しかし、人々は避難する時には、晩発性の障害のことも心配しなければいけない。それは当たり前の話で、世界中で知られていることで、ヒ

ロシマやナガサキを経験した日本が知らないわけがない。

けど、国際的な機関や原子力関係の医学者などが言い続けているのは、急性の放射線障害は原発で働いている人と消防士にしか出なかったということです。そんな彼らにとって都合が悪いのが、ここにある紙、カルテです。避難した人たちが、その途中の病院に立ち寄り、放射能を測って身体の状態を知るようになりました。カルテには、急性の下痢や発熱、皮膚のただれなどがいっぱい書かれています。そこに急性放射線障害という病名が書いてあるわけです。

この紙が非常に都合が悪いわけですね、原子力を進める人たちにとっては。だから、このホイニキの病院では、このカルテが保管されている倉庫だけが、3回も火事が起きました。ようやくこれだけ持ち出しました。それで彼は副院長だったのですが、持ち出した罪で副院長から降格されてしまった。そういうことが起きています。

眼鏡の男性。植物の異変に関して研究している人

壁紙

染色体の研究している医師たちです。こういった研究所にはほとんど研究費が出ません。研究助成金というのはほとんど、IAEAとか原子力産業から出ますので、彼らにとって都合の悪い研究にはお金を出さない、そういう状況にあります。

キノコ

チェルノブイリ原発から10キロ位離れた所で撮影したキノコです。普通だったら手のひらに乗るくらいの小さなキノコが、こんなに大きくなっているのが森じゅうで見つかりました。でも、それは心配ないんだ、もう誰もキノコ採りに行かないから、これだけ大きくなったと、向こうの人間は言ったりしていた。そんなこと、住民は信用しません。

スリーマイル、カエデ

植物異変を集めている人。長さが60センチ位になった、たんぽぽの葉っぱ。植物によって大きさや色、

形と、伝わる異変は違います。カエデの場合も、葉が大きくなったり、途中で色が分かれたりしますが、普通のカエデは枝から出てくるのに、変形してツルのように巻き付いているというものがあったりしました。それはチェルノブイリにもあります。

スリーマイル島周辺でも、いろいろな調査が行われましたが、心配ない、ガン患者は出ていないと言われてきました。日本の新聞やテレビでも、福島事故の後、心配することはないと、専門家が発表したり書いたりしていました。スリーマイル島の研究機関が、全米のガンの発生率とスリーマイル島周辺では、ほとんど違いがないと言っていました。

それに対して、住民たちは反抗しました。そんなわけはない、それならどうして、隣の隣の人も、その隣の人も、みんなガンになり白血病が急に増えたんだと。住民側は一軒一軒個別調査をしていきました。その結果、ガン患者のいる家は黒いマル、白血病の患者がいる家はピンクのマルというふうに、地図の上に印を付けていきました。びっしりと、黒いマル、ピンクのマルが貼り尽くされていました。所々に白い線が入っています。亡くなりましたという印です。

米当局は安全宣言を出し、スリーマイル島周辺のガンの発症率は、全米の平均と同じということを言いました。しかし彼らの調べ方は、ガンの発症率を調べる時は10マイルで調べ、何人中の何人と人口比率を出す場合は15マイルで出したんです。ですので、人口を水増して、全米のガンの平均率と同じにしたわけです。

日本の医学者、権威者たちは、そのことを用い、スリーマイルでもチェルノブイリでも心配ないということ、福島事故の後でも言い続けました。彼らはそのためにお金をもらってきた、助成金ってそういうものですね。

「小児甲状腺ガン多発を徹底して無視したのはIAEAほか 原子力と結びついた 医学者たちだった」WHOも同じです。WHOはIAEAと協定を結んでいますので、放射能について発表する時には、自分たちの発表であってもIAEAの許可が要するという一文があります。

ピンクのパジャマの子

パホモバさんたちが世話していた団体の子です。事故から 10 年位後に甲状腺ガンが見つかった。明日、手術だというので、ゴメリから来ているのだけど、お父さんもお母さんも来れなかった。心配になって、どうですか？と聞いたら、全然平気と言っていたのだけど……

手術台

当日、手術台の上にあがり、これから麻酔だという時になって泣きじゃくり始めたんです。自分はもう麻酔から目が覚めないんじゃないか、そのまま死んでしまうのではないかと。病気を発症するのは何千人に一人だから気にすることない、というようなことを言う医者がありますが、その一人ひとりの人間の恐怖というのは、ものすごく大変なものであるわけです。

そして、自分の学校で一人でもそういう甲状腺ガンの子どもが現れたら、自分もそうなるのではないかと、次は誰なんだと思うようになっていく。

マリアさん

1993 年、ホイニキで母乳の検査を受けるお母さんです。この頃、ベラルーシ中のお母さんの母乳を測ったところ、セシウムとストロンチウムが検出されています。それは、原発に近い所とか遠いとかは関係ありません。日本で言えば、福島県の中だけで検出されるということではない。この時はすでに事故から 7 年位経っていますので、食べ物などを通して全土に波及してしまうんですね。そういうところに、私たちはこれから一番気をつけなければいけないと思います。

ブリピャチ

ターニャ

間に合わなかった子ども、女の子ですね。甲状腺ガンが見つかった時には、すでに肺に、そして脳にも転移していた。苦しみを堪えるだけの毎日でした。もう治らないということで病院から帰されました。14 歳の女の子に、今何か欲しいものがあったら持ってきます

よ、と言ったら、モルヒネと答えたんです。

お母さんに聞きました、なんで医者がモルヒネを出さないのかと。するとお母さんは、貧乏なんです、この国ウクライナは、と言いました。薬というのは治すためにあるのであって、治らない子どもに使う薬はないと。

ドイツの白いシート

白いシートが被せてあるその下には牧草があります。放射能が高いために処理できず、途方に暮れてこんなような状態に。事故から 1 年経たない頃の写真です。

青いシート

日本でも同じような光景がありますね。福島の小学校の校庭に、土が積まれてビニールシートが被せられている。

ドイツのお店

ドイツでは、政府が発表する数字、企業が言う数字は信用できない。だから、自分たちで測るんだということで、市民の放射能測定グループができました。パソコンがまだない時代ですから、リーフレットに、産の何ベクレルと、全部印刷して配った。それを見ながら、買い物をしている女性です。ベルリンです。ミュンヘンにも同じようなのができていきます。

壁にはった紙

どこどこ産のひき肉は 2 ベクレルなので、これは安全です。別の所は 65 ベクレルあったから、販売を中止しましたと書いてあります。一般の人たちは、こういう店を信頼します。自分は、放射能の値がもう少し高いものでも構わないけど、赤ちゃんには低いものを食べさせたいと。日本のように、安全かどうかを言うだけではなく、すべて数字で表して、後は人々に選ばせるようにしていました。

測定器

チェルノブイリ子ども基金が 1991 年に誕生するその前に、チェルノブイリ基金事務局というのがありま

した。その頃に、現地に持っていった最初の救援物資が食品の測定器でした。先ほどの、結婚式をあげていたニーナ先生の学校の校長室が測定室になりました。そこで、自分たちが食べるものを測ることが行われていた。

薬箱の山

日本から薬などもどんどん送り込まれましたが、行けば行くほど、放射能の汚染地帯が広がっているということがわかってきます。とても手では持っていけないので、大きな船にカーゴで積み込み、シベリア鉄道を通して送り込むというように変わっていきました。

ドロズド

ドロズドさんというお医者さん。甲状腺の専門医です。IAEA に盾をついて、実際に甲状腺ガンがどれだけ発症しているかということ、世界に認めさせる闘いをしました。

私たちが救援運動をする際には、病気の状態を知っている人と手を組む必要がありますので、そういう医者たちとも一緒にやりました。1992年、汚染地に住む子どもたちは、このままでは必ずや病気になってしまう。病気を発症しないような、抵抗力のある身体を作るためには保養所が必要なんだということで、保養所を造る協力を要請されました。

そこで、手伝いましょうと相談していた時に彼女が入ってきて、保養所に迎える子どもたちの中には、小児甲状腺ガンの手術をした子どもたちも加えてほしいと言ったんです。彼女が強く訴えていたのは、病気の子どもたちを受け入れるということは、医者や薬の手配が必要だとか、いろいろな不安要素があり、ベラルーシではその体制ができていない。だから受け入れることができていないということでした。その頃までは、小児甲状腺ガンの子どもを受け入れる施設がありませんでした。

このドロズドの訴えを受けて、日本は施設のためのお金だけでなく、とくに甲状腺のガンの手術をした子どもたちの受け入れに関するお金をすべて出すということになりました。

放射能の災害というのは、私たちの手に負えないほ

ど、ものすごく大きい。小さな団体で、何とかなるものではないし、国だって何ともできない。本当に恐ろしい巨大な被害を、いろいろなところにもたらします。

では、チェルノブイリ子ども基金は何をしたらよいかと考え、一つは保養に集中しよう、もう一つは小児甲状腺ガンの子もたちを助ける、そういうプログラムにしました。その子たちはやがて子どもを産んでお母さんになる、そんなときにも支援をします。病気を抱える子どもは、通院や入院のために学校に行けず、勉強が遅れてしまいます。ですので、そのために奨学金をします。

父親というのはだいたい、病気の重圧というか、自分の力では何もできないという無力感で、しかも自分の給料では薬も買えないとなったときに、逃亡する人が多い。アルコールに逃げるか、逃げてしまうか。だから、女性一人で育てる場合がとて多い。そういった家族への支援も始めました。

スキャナー

ガンが身体に転移した子どもたちは、毎年検査したりします。

ホールボディ

ホイニキです。体内被曝の測定をしているところ。

浜岡空撮

浜岡原発。まったく砂浜そのままの所に原発があるということがわかります。500メートルくらい沖のほうから水をとりますが、ここの海はとにかく浅い。地震が起きて水が引いてしまうと、原発は空焚き状態になってしまいます。そこへ津波が砂を巻き上げながら押し寄せます。取水口を砂で完全に塞いでしまった後で原発を襲います。今、停止しているから大丈夫と言いますが、福島4号炉は停止中だったけど……。そんなもんじゃないということがよくわかりますね。

大飯原発

現在問題になっている大飯原発です。今、動かすか動かさないかという。

大飯空撮

谷間を抜けた所にムラがあります。原発からこれだけの近い距離に住宅地があります。逃げる道というのは、南からの風だったら南の方に、北風だったら北の方に、あるいは西や東に逃げれば良いと言いますが、ここにはそんな選択はないんです。道は1本道しかない。ほとんどの原発はそういったような所に建っています。

大飯のコントロールルーム

大飯原発のコントロールルームです。

大飯、炉心

定期点検の時に撮ったものです。

大飯プール

青い光がいやなのですが、使用済みの核燃料を保管している所です。

すべてが、ここですすでにストレステストが終った。それで動かそう、というのが今の動きです。

DAYS

去年発売した「浜岡原発」の特集。この「浜岡」という言葉を「福島」に変えただけで、すべてがそのまま当てはまります。書いたのは広瀬隆さんです。

公園

福島の事故からしばらく経った郡山の公園です。「利用者のみなさまへ。小学生以下の方は、立ち入らないでください」とある。中学生でも、ここに入るのはい日何分以下にしてください、というようなことが書いてあります。今はもうこの看板はありません。上の土を剥がした、それが除染だと言っているんですね。この公園は住宅街の挟まれた所にあるのですが、それら住宅の庭を掃除しているわけではない。そんな所であっても、安全宣言が出されている。今でも、子どもを一日15分以上は外で遊ばせないという幼稚園・保育園もあります。そんなところで子どもを育てているんです。

去年の10月くらいまで、救援の中心は、放射能測定器とくに、食品の測定器を贈るということでした。測定器を贈り、そこに測定所を作ってもらおうという運動だったのですが、今は、子どもたちを逃がす場所を作るといように変えていきました。

ナジェジダ

チェルノブイリ子ども基金が支援している保養所です。写っている子どもたちは全員が、甲状腺の手術をした子どもたちです。

ユージャンカ

ウクライナの南、黒海沿岸のサナトリウムです。子どもの家というのも建てました。

ナジェジダお祭り

みんな甲状腺の手術をした子どもたちです。日本のボランティアが行き、日本の踊りなどを一生懸命勉強したり、コンピュータ教室で習ったりしています。ここに来ると、独りじゃないと感じられるんです。普段は孤立していて、学校に行きたくないという子どもが多いのですが、ここには、同じ病気の子もばかりが集まりますから、解放されるんですね。食堂では、放射能を測定した食材で、かなりきちんとしたものを食べさせるようになっています。

一度に200人くらいが滞在できます。20日前後滞在して、また他の子どもたちと交代しています。希望者が多すぎるために、いつも一杯です。もっとこういう施設が必要です。

新聞記事

福島の子どものための保養所を作りたいと、大田昌秀元知事のところに話をしに行きました。なぜ沖縄県かと言ったら、事故が起こった直後に、沖縄県は県として、疎開してくる人には交通費を出します、そして一年間家賃も出しますと発表した。この問題に関しては、一番に名乗りを上げていきました。びっくりしました。保養する子どもたち全員を支援するというのは終了しましたが。

私たちのアイデア、ベラルーシで必要だった保養所

が日本に必要なのだけれど、国はまったく動こうとしない、そういうことを訴えたところ、大田さんが紹介してくれたのは、ご自分の出身地の久米島でした。

チラシ

チラシにあります、沖縄・球美の里、子どもの保養センターが誕生します。これは山田洋次監督とか、宮崎駿さん、吉永小百合さん、加藤登紀子さん、石井竜也さん、同時に沖縄の人をもたくさん賛同になっていただいて、今、スタートを切ろうとしています。

常時 50 人は滞在できるようにしたいと思います。できるだけ早く、ここで成功して、地元にも迷惑をかけないということを証明して、100 人規模、やがてもっと大きくしていきたいと思いますが、それにはもうちょっと時間がかかるかもしれません。とにかく、交通費が高いですから、それをどういうふうに出すのか。7 月の初めにはスタートさせるつもりです。お母さんと小さな子どものグループから始めて、夏休みには小学生や中学生も受け入れる。

コンクリのたてもの

入り口にギャラリーがあって。昔、陶芸所に作られていたのですが、陶芸所と喫茶店があった。そこを受付というか、子どもたちの勉強するワークショップの部屋にするつもりです。

長い建物。そこを子どもたちの宿舎に改造しています。のぼり窯なんかもあるんですね。それをどういう風に使うか。放射能の測定所も作ります。

ここは希少生物、天然記念物のような樹木などあって、どの木を切ってよいのかとか、久米島の自然を守る会の人に協力してもらって印をつけていっています。赤いリボンが絶対に手をつけない。黄色いリボンは、移し替えても良い、、、町をあげて受け入れるという決定をしていただきました。町議会もそうですし、町長さんや老人会とか婦人会も、そして子どもたちも。

こちらからもいろいろな先生が行って、いろいろな催しをしますが、一緒にやるという形にしたいと思っています。

一番右にいるのが石井竜也さん、左にいるのが久米島の町長さん。

球美の里という名前にしたのは、続日本記の中に球美から来た人のことがかかれています。それが久米島だということ。沖縄あるいは日本列島の中でも一番最初に米が育てられた場所ということで、そのころ米のことを現地では球美と呼んでいたみたいですね。

この海が、どれだけ子どもを癒していくか。

私たちが気をつけなければいけないのは。こちらから疎開に行く人は、それは当然の権利だと思っていますが、沖縄の人にとっては、今まで基地のことも放ったらかし、すべての日本の矛盾を沖縄だけにしわ寄せしておいて、自分たちが必要な時にだけそこを利用しに入っていくのはどんなものか。沖縄の人たちは気持ちは温かい人たちですが、そういう問題は必ず出てきます。税金も払わずに、勝手にお店を作って、地元の店が潰れたりということも起きています。かなり大勢の人口移動が起きていますから。

久米島は、私たちが全面的に協力しようと思ったださっているけど、そういう問題というのは、基地のことなども考えながらやっていかなければいけないと思います。

哲学者の高橋哲也さんは、犠牲の仕組みとして福島と沖縄のことを書いておられます。その考え方はとても参考になりました。それは、1945 年、48 年、それからしばらくずっと、沖縄戦にはじまるあらゆる戦争のいろいろな問題が沖縄の人たちの所にいった。やがて本土復帰をしたといっても、基地はあるままになっていった。日本の国のシステムというのは犠牲のシステムで、必ずどこかに押し付けている。そして、3.11、2011 年にもう一つの犠牲の場所が顕在化した。それが福島だと言います。二つの犠牲の土地、それが現れたと。

沖縄の人たちは、犠牲の場に置かれてきたから、真っ先に手を伸ばす力、優しさを持っていたのではないかと思います。私たちは豊かな自然の中で子どもたちを癒すために、お願いする立場で接するようになっていきたいと思っています。

いろいろな支援をお願い致します。